

あきぞら

登録番号：第4238号

登録年月日：平成7年1月26日

登録者：農林水産省果樹試験場（茨城県
つくば市藤本2-1）

育成者：吉田雅夫 京谷英壽 西田光夫

山口正己 小園照雄 中村ゆり

西村幸一 土師 岳 福田博之

来歴：「西野白桃」と「あかつき」の
交雑実生

特 性

■栽培特性

樹勢は強～やや強で、枝の発生は密で、太さ長さとも中位である。樹姿はやや直立性であるが、樹齢が進むにつれて開張してくる。花芽は多く、複芽となる。花は単弁普通咲きで、花弁は桃色でやや大きい。雄性不稔性で花粉がないため、授粉樹が必要である。葉は濃緑色で大きく、長い。葉緑の波うちは中程度である。

開花期はやや遅く、「白桃」、「白鳳」と同時期となる。生理落果の発生が認められることがある。また、こうあが深いことから、枝押しや収穫前落果の発生も見られるため、短・中果枝中心の結実を心がける必要がある。

収穫期は、「ゆうぞら」、「白桃」よりも10日程度遅く、宮城県、福島県などでは9月中下旬、長野県では9月中旬、山梨県では8月下旬から9月上旬、岡山県では8月下旬が収穫盛期となる。成熟日数は140日余りであるが、東北地方では長くなる傾向が認められ、150日を超える場合もある。これらの地域では、収穫期の気温低下により果実の成熟により多くの日数を要するものと考えられる。

■果実特性

果形は円～扁円形で玉揃いは比較的良好である。果頂部は広く、浅く凹み、こうあは狭く深い。果皮の地色は白色であるが、着色は少ない。果実重は、平均で250g程度であるが、場所によっては300gを超える果実も得られており、今後樹がおちつくとより大玉となる可能性がある。果肉は白色、溶質であるがやや硬く締まり、肉質は良好である。果皮の地色に較べて果肉の軟化が遅れる傾向があるので、注意が必要である。核は粘核で大きさは中程度である。果肉内の紅色素は少なく、核周囲の紅色素は中程度である。果汁の糖度は高く、平均で15%を超え、「ゆうぞら」に比べて1.8%、「白桃」に比べて2%以上高く、現在のモモ主要品種の中でも最も高い部類に属する。酸味はpHで4.0から4.3の範囲にあり、濃厚な食味を呈することが本品種の大きな特徴の一つである。

■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

灰星病、せん孔細菌病などについては他の品種と大差なく、年により発生が認められるので対策が必要である。また、収穫期が遅いことから、夜蛾の被害を受けやすい。

無袋栽培では、果皮の着色が著しく少なくなるため、着色増進のための有袋栽培が必要である。

■地域適応性

成熟日数が地域によって150日を超える晩生品種なので、東北地方の北部や標高の高い地域では栽培が困難であると考えられる。育成されてから年数が少ないため、まとまった産地は見られないが、従来の晩生品種の後に収穫され、品質が良好で大玉となるため、モモの出荷時期の拡大や品質の向上に有効であると考えられる。

(山口正己)